



新藤兼人賞

SHINDO KANETO AWARDS



第22回新藤兼人賞

2017年12月8日(金) 如水会館2F オリオンルーム

主催：協同組合 日本映画製作者協会

特別協賛：東京テアトル株式会社

協賛：松竹株式会社/東宝株式会社/東映株式会社/株式会社KADOKAWA/日活株式会社

日本映画放送株式会社/株式会社WOWOW/株式会社IMAGICA/株式会社ファンテック

後援：文化庁

金 賞

長谷井宏紀『ブランカとギター弾き』監督・脚本



受賞者コメント

「どうして僕がこの賞をいただくことになったのかなあ』ということを考えてはいたのですが、先ほどの言葉（審査員長の講評・選考理由）を聞いて胸が熱くなるものがありました。こうやって日本の方達から応援されているんだなということ、皆さんの愛を、感じました。今、ちょうどルーマニアで映画を作るという動きをやっているのですが、これから日本でも作っていきなと思ってまして、もしも、この中に、僕と一緒に何か仕事してやってもいいぞとっていただけるような方がいらっしゃいましたら、声をかけていただけるととても嬉しいです。今後ともよろしくをお願いします」

受賞者プロフィール 岡山県出身。映画監督・写真家。セルゲイ・ボドロフ監督『モンゴル』（ドイツ・カザフスタン・ロシア・モンゴル合作・米アカデミー賞外国語映画賞ノミネート作品）では映画スチール写真を担当し、2009年、フィリピンのストリートチルドレンとの出会いから生まれた短編映画『GODOG』では、エミール・クストリッツァ監督が主催するセルビア Kustendorf International Film and Music Festival にてグランプリ（金の卵賞）を受賞。

その後活動の拠点を旧ユーゴスラビア、セルビアに移し、ヨーロッパとフィリピンを中心に活動。

フランス映画『Alice su pays s'e'merveille』ではエミール・クストリッツァ監督と共演。2012年、短編映画『LUHA SA DESYERTO(砂漠の涙)』（伊・独合作）をオールフィリピンロケにて完成させた。2015年、『ブランカとギター弾き』で長編監督デビューを果たす。現在は東京を拠点に活動中。

銀 賞

石川 慶『愚行録』監督・編集



受賞者コメント

「この度はこのような素晴らしい賞をいただきまして本当にありがとうございます。先ほどのお話（審査員長の講評）にあったように素晴らしいスタッフ、キャストに支えられて作った映画ですので、この喜びは皆さんと分かち合えたら嬉しいです。僕は、去年亡くなられたアンジェイ・ワイダ監督の出身校でもあるポーランド国立映画大学で学んでいたのですが、とても印象に残っていることがあります。学校にフィルムアーカイブがあり、戦後からの35ミリフィルムが何万本も保存されている中に新藤監督のフィルムも勿論ありました。共産主義の時代にも西側の映画を自由に観られる唯一の場所だったというのもあって、人気のある映画はフィルムが擦り切れていて実尺よりも全然短くなっていたりしました。その中で、新藤監督の『裸の島』や『鬼婆』は、本当に人気のある作品で、フィルムがすごく擦り切れていたのをよく覚えていて、同じ日本人としてとても誇りに思ったと同時に、映画ってというのは国境も時代を超えるんだなあとすごく感動したのを覚えています。本日、その新藤監督の名を冠した賞をいただけることは、これから映画を作り続けるだけでなく、ちゃんと志しのある映画を作っていけよと言われていたような気がしています。今後とも精進していきたいと思います。本日はどうもありがとうございました」

受賞者プロフィール 1977年、愛知県出身。東北大学物理学科卒業後、ロマン・ポランスキーらを輩出したポーランド国立映画大学で演出を学ぶ。短編作品の制作を中心に活動し、MoMA主催のNew Directors, New Filmsやシッチェス・カタロニア国際映画祭など、50以上の国際映画祭に出品。札幌国際短編映画祭・脚本スペシャルメンション、黒澤記念ショートフィルムコンペティション佳作などを受賞。日本とポーランドの合作長編企画『BABY』はプチョン国際映画祭企画マーケットでグランプリにあたるプチョン賞を受賞している。『愚行録』が長編映画監督デビューにして第73回ベネチア国際映画祭オリゾンティ・コンペティション部門に選出される。その後、山田孝之主演、主題歌Yonigeの楽曲からインスパイアされ制作されたショートフィルム『点』（2017）の監督・脚本・編集を担当。次回作は今年の釜山国際映画祭で製作発表された5人の監督による国際共同製作短編オムニバス作品『十年 日本（仮）』。

プロデューサー賞

山上徹二郎 『もうろうをいきる』企画・製作・プロデューサー、『海の彼方』共同プロデューサー



受賞者コメント

「同じ苦勞をしているプロデューサーの皆さんから選んでいただいて素直にありがたい。劇映画 とドキュメンタリーの両方を作ってきましたが、2本のドキュメンタリー作品で選んでいただいたことがとても感慨深いです。ドキュメンタリーはまだまだ沢山の方に観ていただける環境が整っていないのですが、これをきっかけに観ていただければと思います。私は映画製作だけでなく、この10年ほどバリアフリー上映を推進しています。目や耳に障害 がある人たちが観客とみなされてこなかった歴史を変えるためにも、お金はかかりますが、バリアフリーを映画の一つの未来の形としてスタンダードにしていければと思います。『もうろうをいきる』の監督の西原孝至さんに来ていただいております。西原さんをご紹介したいと思います（西原監督を紹介）『もうろうをいきる』につきましては本当に彼がひとりで孤軍奮闘して作ったということだと思います。今日の賞金の使い方は西原さんと相談して 決めたいと思います。『海の彼方』の黄監督は台湾の方にいますので今日は来ておられません、報告をしたいと思います」

受賞者プロフィール 株式会社シグロ代表／映画プロデューサーNPO 法人メディア・アクセス・サポートセンター（MASC）理事長、長崎大学・核兵器廃絶研究センター 非常勤講師

1954年熊本県生まれ。1986年にシグロを設立、以来70本以上のドキュメンタリー映画、劇映画を製作・配給。ベルリン国際映画祭・銀熊賞をはじめ、国内外の映画賞を多数受賞する。主な作品に、『絵の中のぼくの村』『まひるのほし』『ぐるりのこと。』『沖縄 うりずんの雨』『だれかの木琴』など。現在、最新作の日韓合作映画『蝶の眠り』の公開を控えている。NPO 法人メディア・アクセス・サポートセンター（MASC）を通して、長年バリアフリー映画の普及、制作に努める。

金賞・銀賞選考委員講評

審査委員長：進藤淳一（フィルムフェイス）

新藤兼人賞の対象は劇場公開作品が3本以内の監督です。今年も約180本の対象作品があり、私を含めて5人の審査委員で手分けして見る事になりました。毎年ドキュメンタリー映画が増えてきているように感じますが、今回は授賞に至る作品はありませんでした。作品が増えているのは、機材やポストプロ等のデジタル化により低予算での制作が可能になった事にも要因はあるとは思いますが、YouTube等の公開の場が出来てきた事にも大きな原因はあるように感じます。言い換えれば、誰でも映像表現者に成りえるのです。しかしながら「プロフェッショナルとして私たちプロデューサーが組んでみたい」と考える監督はそう多くはないように感じます。今年も最終選考に、金銀受賞作品のほか、小森はるか『息の跡』、永井聡『帝一の国』、菊地健雄『ハローグッバイ』、岸善幸『あゝ、荒野』が残りましたが、他にも沢山の魅力ある作品がありました。金賞受賞の長谷井宏紀『ブランカとギター弾き』は観た段階でかなり良い作品だと感じました。しかし、この作品はイタリア映画なので授賞対象外だという見かたもあり、検討にかなりの時間を要しましたが、長谷井さんのこの作品への取り組みや、本賞の原点である「現役のプロデューサーが組んでみたい新人監督を選ぶ」という考えに基づいて選出する事になりました。銀賞受賞の石川慶『愚行録』は、普段であればなかなか出会えないであろう作品でしたが、とても力がある監督の思いが絵に出ているように感じました。キャスティングが素晴らしいとも思いました。私はシナリオが出来、スタッフが決まってキャストが決まった段階でほぼ形が見えると思っています。そういう意味では両作品とも完成前にある程度は期待できていたのではないかと思います。期せずして両作品ともイタリアとポーランドという外国がかかわっていますが、積極的に海外とも関わっていくような作品作りに、今後の日本映画界の更なる飛躍を期待します。今回もベテランと言われる年齢の監督もいましたが、諦めずに頑張っている事に敬服しています。

孫 家邦（リトルモア）

金賞の「ブランカとギター弾き」は、とても気持ちのよい映画でした。少女と老人の日常的なシーンのスケッチに上質な抒情が漲り、見ていて楽しかった。長谷井監督が次回作で今度はどんな「場所」を選び、どんな「人」に出会うのか、興味津々です。銀賞の「愚行録」は、スタッフ、キャストの技術力の高さに目を見張りました。撮照、美術（製作部のロケ場所選定を含む）、演技陣のお芝居の安定感、どれをとっても監督の統率力なしでは成立せず、新人らしからぬ見事な仕事だと思います。「あゝ、荒野」前後編は、これから日本映画を考えた上で、非常に重要な作品でした。配信を前提に作られたであろうこの作品の尺<時間>が長くなるのは、その出自からしていたしかたないのだろーと思います。しかし、映画館で一本の映画として<前編><後編>に対峙したとき、長尺を構成する様々なエピソードが、僕には十全に魅力的には思えなかった。DVD・ブルーレイなどの商圏が縮まる中、これからの独立系映画の製作費集めは困難を極めるでしょう。そんな過渡期に相当な熱量をもって一石を投じたこの映画の製作陣、監督、スタッフ、キャストには敬意を表します。

候補作には、それぞれ刺激をもらいました。熟考の上、僕が選考会で支持したのは「ハローグッバイ」「息の跡」の二本でした。

豊島雅郎（アスミック・エース）

今年度の新藤兼人賞（新人監督賞）候補作品数は過去最高となる181本でした。金賞の長谷井宏紀監督『ブランカとギター弾き』は、異色のイタリア映画であり日本の映画賞では外国語映画扱いになってしまうところ、審査員5人中4

人が「日本の製作資本が入らない映画ではあるが日映協理事プロデューサーとしてぜひ次に仕事をしたい新人監督」という観点から強く推しての受賞となりました。銀賞の石川慶監督『愚行録』は、議論に議論を重ねた上で審査員5人中3人の過半票を得ての受賞となりました。個人的には、一筋縄ではいかない題材を石川監督と共に見事に映画化した企画・プロデュースの加倉井誠人プロデューサーにも敬意を表したく思います。また、今回惜しくも選に漏れましたが、永井聡監督『帝一の國』は商業性と作家性の両軸で映画業界に存在感を示したメモラブルな作品であったことも記しておきたいと思います。さて、今年度の金賞・銀賞の話題に戻すと、長谷井監督『ブランカとギター弾き』にはフィリピンのスラム街を舞台に孤児の少女と盲目のギター弾きが心通わせる市井の人のお話を現地スタッフ・キャストと共に素敵な小品に昇華させた腕力に唸りましたし、石川監督『愚行録』には日本人キャストが演じているにもかかわらず日本映画らしからぬヨーロッパ映画の如くの風合いに仕上げた力量に驚かされました。今回新藤兼人賞受賞お二方の今後のご活躍を心より祈念いたしております。

梶井省志（アルタミラピクチャーズ）

人は、古来、歌を歌いながら生きてきた。詩を紡ぎ、それを声にする、自分の思いを歌う。か細く浅黒い手足の少女の口から流れ出る歌声と詩……。ブランカは、母親を買おうと金の為の歌う。生きるために歌う。生きているから歌うのだ。そして、そんな少女の切ない路上生活を、フィリピンの下町の猥雑な色彩と喧騒が奏でる音と入り混じって、盲目の男の爪弾きギターの音色が伴奏する。そんな人や物や色がブランカの歌声になって私達の耳に響く時、この作品は私達の心を優しく掴んで離れないものになった。歌が、彼女の純粋さを裏切らせないでいてくれた……。ストーリーが単純で話が甘いのではという批判も一部にはあったが、私は決してそうは思わない。貧しい者の、弱者の歌が、その歌を主体としたストーリーと映像が、この作品を他から際立たせている。そして、この飾り気のない素朴な話が長谷井宏紀監督のスモーキーマウンテンでの体験から生まれた話だからこそ、少女ブランカや盲目のギター弾きのキャストがリアルに感じる事ができたのだろう。さらに、この企画は、ベネチア映画祭の全面支援で生み出された作品であることも特筆すべきだ。そこには日本の脆弱な映画出資事情もあるのだが、タフな長谷井監督は、次回もきっと、日本映画界のこの困難を乗り越えて、日本を舞台にした作品を実現し、我々を魅了してくれるに違いない。もう一方、銀賞に選ばれたのが、同じく海外で映画を学び、国内で研鑽を積んできた石川慶監督だ。オフィス北野の眼に止まり『愚行録』で監督するチャンスを得た。正直、本作品に関しては、随分と好き嫌いがはっきりと別れたが、監督としての力量は十分に評価されたのではないか。次回の石川監督のオリジナル企画が楽しみである。今回の選考では、二人の国際級の新人が登場し、日本映画界の新たな時代の予感を感じることができた。

山上徹二郎（シグロ）

今年も審査対象の作品は180作品を超えた。中でもドキュメンタリー映画の劇場公開本数の増加が著しく、力のある作品も増えている。東日本大震災後と福島第一原子力発電所の事故後を撮影したドキュメンタリー映画は毎年何本も製作されているが、震災から6年が過ぎた今年作品には、その時間の経過とともに被害そのものの実相を越えて、撮影対象との親和性が担保された良質な作品が生まれ始めているように思う。最終選考まで残った小森はるか監督のドキュメンタリー映画『息の跡』はそのような作品だった。西原孝至監督のドキュメンタリー映画『もうろうをいきる』も、登場する8人の盲ろう者の中に、3.11の津波を経験し今も石巻の漁村に生きる盲ろう者が取り上げられている。銀賞を受賞した石川慶監督の『愚行録』、岸善幸監督の『あゝ、荒野』前編・後編、中村高寛監督のドキュメンタリー映画『禅と骨』も力作だった。また、今年はロングラン・ヒットしたドキュメンタリー映画が存在した。最終選考には残らなかったが、伏原健之監督の『人生フルーツ』、佐古忠彦監督の『米軍（アメリカ）が最も恐れた男その名は、カメジロー』も注目作だと思う。金賞をとった長谷井宏紀監督の『ブランカとギター弾き』は、その企画から製作・演出に至るまでまさに映画的な表現の力強さを感じさせる秀逸な作品だった。受賞は逃したが、菊地健雄監督の『ハローグッバイ』も好きな青春映画だった。

プロデューサー賞選考委員講評

日本映画製作者協会 理事：榎井省志（アルタミラピクチャーズ）

映画製作配給会社、シグロが設立されて今年で31年になります。山上徹二郎氏は代表として、そしてプロデューサーとして、新人からベテランまで国内外の監督と組んで数多くの秀作を生み出してこられました。各国の映画祭での受賞をはじめ、パリのシネマテーク・フランセーズでは一ヶ月間に亘りプロデュース作品の特集上映企画が組まれるなど、シグロ作品は国際的にも高い評価を得ています。本年度も『もうろうにいきる』と『海の彼方』が公開され、その制作意欲は止むことはありません。ドキュメンタリー分野では、あくまでも劇場公開に拘わると共に、メッセージ性の強い骨太の作品を作り続け、シグロのブランドを築き上げました。また、山上氏は「映画・映像のバリアフリー化」に取り組んでこられ、より多くの方が映画を楽しめるように尽力されています。同業のプロデューサーの仲間一人として、山上氏の長年のご努力に敬意を表するとともに、その今日までの業績を讃え、新藤兼人賞プロデューサー賞を贈るものです。今後の更なるご活躍を期待いたします。

【金賞・銀賞 審査会にて選出・審議された作品】※自薦・他薦含む ※太字は最終候補

小森はるか『息の跡』、石川慶『愚行録』、永井聡『帝一の國』、菊地健雄『ハローグッバイ』

岸善幸『あゝ、荒野前篇』『あゝ、荒野後篇』、長谷井宏紀『ブランカとギター弾き』

西原孝至『もうろうにいきる』、中村高寛『禅と骨』、伏原健之『人生フルーツ』、東伸児『しゃぼん玉』、松本准平『パーフェクト・レボリューション』、坂牧良太『ひかりをあててしぼる』、遊川和彦『恋妻家宮本 KOISAIKA MIYAMOTO』、堀江貴大『いたくても いたくても』、黄インイク『海の彼方』、瀬田なつき『PARKS パークス』、越川道夫『海辺の生と死』、佐廣原暁『ポンチョに夜明けの風はらませて』、坂下雄一郎『東京ウィンドオーケストラ』、佐古忠彦『米軍（アメリカ）が最も恐れた男~その名は、カメジロー~』、菊地健雄『望郷』、板尾創路『火花』、南柱根『空と海のあいだ』、石川淳一『ミックス。』、吉田光希『三つの光』、奥田庸介『ろくでなし』、小田香『鉦ARAGANE』、田口敬太『ナグラチームが解散する日』、岩切一空『花に嵐』、守屋文雄『まんが島』、飯塚俊光『ポエトリーエンジェル』、横尾初喜『ゆらり』、広田レオナ『お江戸のキャンディー2 ロワゾー・ドゥ・パラディ（天国の鳥）篇』、吉野竜平『スプリング、ハズ、カム』、小野親一『そろそろ音楽をやめようと思う』、杉山泰一『トモシビ 銚子電鉄 6.4km の軌跡』、森ガキ侑大『おじいちゃん、死んじゃったって。』、西田征史『泥棒役者』、岡部淳也『BRAVE STORM ブレイブストーム』